

頸椎神経痛顛末記

染 谷 秀 雄

クリスマスの翌日、いつものようにさて寝ようとベッドに横になろうとしたとき、右肩に激痛が走った。どうしたことだろうと起き上がつてじつとしていた。暫くして痛みが治まってきたところで横になつたがまたしても激痛。仕方がなくベッドに脚を垂らしてただじつと痛みが治まるのを待つた。もの凄い痛みだ。取り敢えず家にあつた痛み止めを服用して様子を見たのだが横になれずにそのまま座つて夜を明かした。午前中に早く、かかりつけ医の紹介状を持って近くの病院へ行つた。昼近くになつてしまつたが紹介されたのは整形外科。昼近い時間であつたが、まだ診察待ち。何処へいっても整形外科は繁盛のようで患者で溢れていた。先ず頸の辺りのレントゲンを数枚撮り、詳細を診るMRIがここでは混んでいて直ぐには出来ないというので別の専門のところへ行つて撮影、その結果、「頸椎神経痛」と診断された。何でも頸椎の五番、六番辺りが狭くなつていることで流れが留まつてしまつていて手術しない限り当面は痛み止めという対症療法になるとのことで、昼間には痛みが出ないならば夜だけの服用で大丈夫でしょう。眠くなるのでと一日夜一回十日分の薬を処方された。ただ、医師が契約医で第二週の金曜日だけ診察と言われ、不安ではあつたが仕方なく薬があればまあいいかと了承した。これで正月に医者が休みでも過ごせると思つていた矢先、また、ベッドに横になろうとした途端に激痛が走り、やつとのことで起き上かつて、ただじつと坐つたまま四時間ほど眠つた。その間も市販の痛み止めを服用した。こんな生活は今後体力的に続かないと思われ不安であつたがようやく一月第二金曜日となつて、一日二回服用できる分の薬を大量に処方して貰つた。

時折痛みは走つたがそれも徐々に痛みがなくなり、いまは痛みも出づに過ごしている。